

歴史探訪ツアー（野島道）

日時：2015 年 11 月 8 日（日）

集合時間：13:30

集合場所：金沢文庫ふれあい広場

行程：

ふれあい広場 → 君ヶ崎 → 町屋神社 → 嗣法山傳心寺
→ 入定塚（入成塚） → 野島運河 → 野島掩体壕
→ 野島稲荷神社 → 野島水路

資料目次：

- ①君ヶ崎稲荷神社と泥亀新田
- ②嗣法山傳心寺の原魯吉碑
- ③入定塚（入成塚）
- ④野島掩体壕
- ⑤野島稲荷神社

キーワード：

新田	江戸時代
教育	明治
戦争遺跡	昭和

①君ヶ崎稻荷神社と泥亀新田

由緒書きらしきものは置かれていない。社殿は国道に沿って横須賀方面に向いており、社殿に向って左側には、無縁供養塔や、寺前村寒念仏講中と記された石仏を含め、数体の石仏が鎮座している。境内には鳥居があるものの、稻荷社につきものの狛狐は配置されていない。その代わりに、社殿の屋根の上の右と左に一对の狐の飾り瓦が使用されている。

社殿に向かって左側に鎮座する寒念仏講の石仏には、宝永元年（甲申年）の建立と刻字されている。宝永元年（甲申年）は、西暦で言うと 1704 年である。宝永元年の前年である元禄 16 年（1703 年）には、元禄大地震と後に呼ばれる大きな地震が起こった。この地震は房総半島南端に位置する千葉県野島崎が震源であったとされ、関東各地に大きな被害をもたらした。

泥亀という地名は、長島段右衛門祐伯の号である「泥亀」に由来している。長島祐伯（泥亀）は私財を投じ、寛文 8 年（1668 年）から新田の開墾をはじめた。開墾開始から 36 年後にあたる元禄 16 年（1703 年）に元禄大地震が起こった。泥亀新田もこの地震で陥没・浸水するなど、かなりの被害を被ったという。この大地震を機に、元号は「元禄」から「宝永」に改元された。

一般的に寒念仏講中は、大きな災害をきっかけとして編成される。君ヶ崎稻荷神社の社殿脇の寒念仏講石仏が、元禄大地震の翌年である宝永元年（1704 年）に造られたことから察するに、この地震による災害をきっかけとして、寺前村にも寒念仏講中が組織されたと考えられる。

君ヶ崎には、かつて一つ松という古松があった。この岬上の松の傍には、近年まで古墳があったが、現在は失われている。一つ松については、『鎌倉攬勝考之十一附録』（河井恒久・植田孟縉、1915、『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』、大日本地誌大系刊行会）に次のように書かれている。

君か崎一つ松 町谷村の西裏の出崎に、一樹ある古松をいふ。

②嗣法山傳心寺の原魯吉碑

原の石碑は、嗣法山傳心寺の境内に向かい左側の敷地内にある。石碑の表には「故金澤学校訓導 原魯吉先生之碑」と書かれており、裏には「先生江都人父祐之介明治七年冬為金澤學校訓導十三年三月九日没享年三十一法名青山愛水居士」とある。金澤學校というのは、明治 6 年（1873 年）に、現在の金沢区洲崎の知足山龍華寺（真言宗御室派）に作られた「知足学舎」のことである。この学舎は明治 9 年（1876 年）11 月 20 日には、現在の金沢区寺前に校舎が新築され、「金澤學校」と改称された。金澤學校は、現在、金沢区町屋町にある横浜市立金沢小学校の前身である。石碑の記述によれば、明治 7 年（1874 年）から、原は金澤學校で教職に就いていた。また、石碑の文字には「先生江都人父祐之介」とある。ここで、「江都」とは「江戸」の異称であると考えられる。この箇所を見る限り、原は地元の出身ではない。また、父、祐之介についての詳細は不明である。

石碑裏に書かれた「先生江都人父祐之介明治七年冬為金澤學校訓導十三年三月九日没享年三十一法名青山愛水居士」の下には名前が多数列举されている。その中には例えば佐藤忠蔵・前田國松・平田恒吉といった名前を読み取ることができる。この 3 人は、当地の明治期における教育者であった。

◆佐藤忠蔵：文政 11 年（1828）～明治 35 年（1902）

維新後、六浦の光傳寺内に春潮堂という漢学塾を開く。この塾が明治 6 年に村立三分学舎（現六浦小学校）となり、初代主席教員（校長）に就任。

◆前田國松：生没年不明

知足学舎（現金沢小学校）発足時の教員。

◆平田恒吉：文久 3 年（1863）～大正 4 年（1915）

明治 27 年、三分小学校(現金沢小学校)の初代校長に就任。

原が執筆した『洋算比例自在』は明治 10 年（1877 年）12 月の出版である。この時期は、いわゆる「学制」期と呼ばれる時期である。この期間は、日本の教育における大きな転機であった。「算術」教育の分野では、「学制」期は、西洋の数学を学校教育に採り入れようとした時期であり、それは「和算」から「洋算」への転換期でもあった。なお、「学制」は、明治 5 年（1872 年）に公布され、明治 12 年（1879 年）に廃止された。

③入定塚（入成塚）

横浜市金沢区の小柴から野島に至る海岸は、現在は、「海の公園」という名前の人工の砂浜になっている。入定塚は、この「海の公園」沿いの高架を走るシーサイドラインの脇にある。また、野島は、今でこそ、その名前のごとく「島」になっているのだが、江戸時代には地続きであった。

小柴から野島への道は、以前はしばしば水没したようだ。上述の「入成塚之由来」によると、そのことを憂いた旅の僧が人柱となった。それ以来、この道が流されることはなくなったという。

ところが、地元によくから伝えられてきたこの物語の旅の僧は、実は、旅の僧だったのではなく、近隣の嗣法山伝心寺で修行をしていた伝海行人であったということが近年明らかになった。『こけし発生の謎：闇の中の間引き供養考』（清塚、2006）に、次のように記されている。

〈荒れる海から道守った人柱の身元わかる。三百十年前の村の恩人は地元の僧侶〉との見出しで、昔々地元の大切な道が、海が荒れるためすぐに壊れてしまい、これを知ったお坊さんが自ら人柱になって守ってあげたという言い伝えがあり、そのお坊さんの正体をつきとめたということである。横浜市金沢区の町屋町地区には延宝四年（一六七六）七月十七日を命日とする伝海行人の供養塔が祀られているという内容である。記事はこう続く。「今でも念仏講のお年寄りたちが毎月命日に出向いて供養している。ただ伝海とは一体どんな人なのかかわからないでいた。勝目会長が今春たまたま伝心寺（町屋町）の二十三世住職の書いた古文書の中から伝海行人についての記述を見つけた。それによると、この人は町屋村の市左衛門の子供で、伝吉といい、寺前村の平兵エ方に養子に行ったあと、同寺に弟子としてもらい受けられ伝海と称した。ところが、体が弱く、自ら人柱となって村の難儀を救おうと延宝四年七月十七日入定した（生き仏になった）とするされている。町屋の恩人は古文書にある伝海に間違いがないことが分った」とある。古文書に記された人物が特定できたとの内容である。

伝海行人の嗣法山伝心寺は、入定塚がある場所からは、海を背にして数分ほど歩いたところに今もある。ちなみに、延宝四年は1676年である。

④野島掩体壕

野島掩体壕の西側入り口に書かれた、横浜市による説明書きを示す。

野島掩体壕は、横須賀市夏島町にあった旧横須賀海軍航空隊基地の戦闘機を空襲から守る施設として建設されました。

この掩体壕は、標高約 55 メートルの野島山の東西をトンネル状に貫通しており、長さは約 260 メートル、両側に出入り口があります。

出入り口の部分は、幅約 20 メートル、高さ約 7 メートルで、トンネル状にコンクリートが打設されており、中央部分は、幅約 10 メートル、高さ約 8 メートルで、素掘りの状態です。

作業に当たった横須賀海軍の「第三〇〇設営隊戦時日誌」には、太平洋戦争末期の 1945 年(昭和 20 年)3 月 15 日から 6 月 30 日までの掘削工事が進められていた記録が残されており、同時に掘削されていた夏島掩体壕とあわせて、海軍の小型機約 100 機を格納する計画でしたが、終戦で実際に使用されることはありませんでした。

通常の掩体壕は、戦闘機 1 機を格納する程度の大きさが一般的で、この野島掩体壕は、現存する掩体壕の中でも国内で最大規模と言われています。

第三〇〇設営隊は、横須賀海軍施設部第一部隊を改編した部隊で、海軍の将兵に技術者を加えた精鋭部隊でした。日吉台（横浜市港北区）の旧日本海軍連合艦隊総司令部地下壕や松代大本営地下壕（長野市松代町）などの建設にも加わっていました。

平成 22 年 3 月 横浜市

この野島掩体壕は、いわゆる一般的な防空壕に較べるとはるかに規模が大きい。因みに、掩体壕が貫通している野島山の山頂には、かつて、高射砲が据えられていたという。

追補

野島：陸繋島（りくけいとう）→島→陸繋島→島

野島運河開削：1945 年

野島水路閉鎖：1966 年

野島水路開通：1994 年 海苔

⑤野島稲荷神社

野島稲荷神社は、野島では唯一の神社である。以下、神社の鳥居脇に掲示された由緒書きを転記する。

野島稲荷神社由来

鎮座地 横浜市金沢区野島町 二十三ノ一

祭神 倉稲魂命 (合祀神) 天照皇大神 菅原道真公 市杵島姫命 誉田別命 天児屋根命 須佐之男命

境内社 神明社 船玉社 秋葉神社 金毘羅神社 天満宮 皇大神宮

神事と芸能 元旦祭一月一日 賽の神一月十四日 稲荷祭二月初午日 夏大祭七月吉日 汐祭九月一日 霜月祭十一月二十三日

社殿 相之間造 本殿流造 幣殿両下造 拝殿入母屋 銅板葺

由緒沿革 金沢八景の一つ野島の夕照で知られる野島山南側山裾に鎮座する稲荷神社(正一位稲荷大明神)は豊川稲荷、笠間稲荷、伏見稲荷、の日本三大稲荷の中の京都伏見稲荷の系統です。この神社は野島町の総鎮守で倉稲魂命(ウガノミタマノミコト)をおまつりしています。

野島神社は安貞元年一二二七年今から約七百七十年の昔、鎌倉時代に阿波守長島維忠の発願により、その子修理佐頼勝が造立したものと伝えられています。

また、土地の古老によれば万治年間(一六五八～一六六〇年)野島浦の南端に紀州大納言徳川頼宣公の別邸があり、これを塩風呂御殿と称したということです。

稲荷神社はちょうど塩風呂御殿の東北の方向にあり、そのため鬼門の守り神として頼宣公の厚い尊信を受け社殿造営にも力を尽したということです。

平成十四年五月吉日 氏子総代

社殿に向かって左側の崖部に、垂水を受ける溝が穿たれている。この溝は、崖面に沿って、右上から左下に向かい掘られている。崖部からは地下水がしみでており、垂水は溝に受けられる。そして、溝に沿って流れた水は、これも崖に穿たれた小さな窪みに溜められるのだ。普段はこの窪みはほとんどかわいているが、雨が降った後などには水が溜っている。近所の古老の話によれば、垂水の量は、以前に比べると随分すくなくなったという。この垂水は、かつて、手を洗い、口をすすぐための水として使用されていた可能性もある。

社殿の左側の崖部のさらに奥の方には細い階も穿たれている。これは、古老によれば、階の上部に鎮座していた小祠に登るためのものだそうだが、現在は登ることが困難な状態に見える。